

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

日本ギaskell協会ニューズレター

『ギaskell中・短編小事典』出版に思うこと

多比羅 眞理子
(元日本ギaskell協会会長)

『ギaskell中・短編小事典』を平成28年3月に上梓してほぼ一年が経過しました。私には、その一年はつい最近のこともあり、同時にかなり過去のことに思えます。

今回、巻頭エッセイに本事典出版について書く機会を頂いたことから、改めて本事典の存在を自分なりに見直してみよう。

事典作成に参加してくださった執筆者の方々について、事典出版の母体となったギaskell協会研究会「ギaskellの短編を読む会」の経緯、また、本事典の校正上の問題点や苦労については「あとがき」に詳しく書かせて頂きましたので、ここでは研究会に参加し、本企画に参加の意思のある会員へ配布した企画書の一部を紹介しましょう。それが本事典の存在意義を最もよく表わしていると思うからです。

「企画の目的…エリザベス・ギaskellの短編小説研究は未開拓の領域である。ギaskellは短編小説を35編以上発表している。登場人物も多岐にわたりテーマも様々で、多くの魅力を持っている。今回事典出版を計画したのは、これからギaskellの短編作品の研究が進むときに備えて、読者の手引きとなる短編事典を出版し、ギaskell作品の多面性を世に広めたい」と第一にあげました。実際に、彼女の短編は読まれてはいるのですが、漠然とストーリーを思い出すものの、書かれた年代、その背景、登場人物などを長編のように明確に浮かばないのです。私たちは必要に応じてウォードやシャープスの研究書を開いて再確認するのが現状です。そのため日本語で書かれた短編小説のガイドブックの必要性を常々感じていました。その意味では研究会活動で短編を読んでいる会員がその執筆をするのが最適と考えたのでした。研究会に参加している会員の方々も事典の出版を望まれていました。事典には短編だけでなく、中編も加えることで意見が一致し、執筆の開始となりました。

出版後、「このようなガイドブックが欲しかった」と感想が多く寄せられたことは、本書の目的が少しでも果たせたのではないかと、それまでの苦労が癒される思いがしました。私自身、短編に関する事典をまとめたかったと前から思っていたのですが、一人では到底困難でした。それが、今回、会員の方々の協力で実現できたことは嬉しく、また感謝の念でいっぱいです。思い起こせば、私とギaskellの短編とのつながりは古く、ギaskell協会創立後の第一回例会で、「手と心」を紹介したのですが、初代会長の山脇百合子先生からほとんどの方がこの作品をご存じないと伺い、発表の前に作品をコピーして参加者に配布したという懐かしい思い出が甦ります。

企画書の2つ目の目的として挙げたのが「研究会に参加する若い研究者と出版を計画、実行すること」です。文学研究が日々世の片隅に追いやられ始めている今だからこそ、若い研究者と共に出版の機会を持つことが、長らくギaskellの会員であり、また、彼らより年を重ねている私の務めと近年強く感じていました。出版作業を共に行うことは、若い方々の目覚ましい成長を促すものです。実際、今回もそうでした。

そして今回、事典の項目、形式は統一しましたが、「作品のテーマ」の書き方、内容については執筆者の意向に委ねました。研究会に参加されている会員はすべてギaskellの研究家ではありません。研究会でもこうした方々からギaskellの作品の魅力を教えられる場面が多々ありました。他の作家を研究している執筆者が担当したギaskellの作品に対する視線は新鮮で、従来の角度よりも広がるはずと考え、統一見解を提示せずに執筆者にお任せしました。今回の事典ではその方向でよかったと考えています。

出版物には細心の注意を払っていても思わぬ見落としや誤記が見いだされるものですが、本書でも出版後に思い違

いや誤記をご指摘頂きました。どの段階で間違えたのかを過去の校正原稿と慌てて照合しましたが、出版の恐ろしさと監修者としての未熟さを改めて実感しております。

ギャスケルは『メアリ・バートン』の中でアリスに「悲しみは神の思召し」(“Every sorrow in her mind is sent for good”)であり「思い悩む心は神のご意思ではない」(“Anxious mind is never a holy mind”)と語らせています(第5章)。私が座右の銘としている文章です“every sorrow”は「困難」に、そして「全ては良きことのために与えられる」とそのままに置き換えて考えております。今回の事典の構想段階から原稿執筆、また、校正作業、出版までの道のりはまさにこのアリスの精神と重なるのです。今回、生まれた事典がギャスケルの中編・短編作品を理解するガイドブックとして少しでもお役に立てましたら制作過程の困難も全て「良きこと」へと変わります。そして、皆様の本棚の片隅にでも置いて頂けましたらさらなる喜びとなるに違いありません。

◆◆◆新刊紹介(2016年度)◆◆◆(掲載情報は2017年3月15日までに報告されたものです。)

市川千恵子共著『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』(彩流社)

市川千恵子共訳『歴史のなかのブロンテ』(大阪教育図書)

鈴江瑋子著『まぼろしを地図にして』(開文社)

巽孝之編『人生の住処』巽豊彦遺稿集(彩流社)

多比羅真理子編著『ギャスケル中・短編小事典』(開文社)

松岡光治編訳『ギッシング初期短編集「親の因果が子に報う」他8編』(アティーナ・プレス)

*新刊書の情報を事務局(secretariat@gaskell.jp)までお寄せ下さい。締切は2018年3月15日です。

第28回例会レポート

日 時:平成28年6月4日(土)午後2時から

会 場:岐阜県立看護大学講義棟・講義室201

開会の辞:日本ギャスケル協会会長

鈴木 美津子(東北大学名誉教授)

研究発表:司会 宮丸 裕二(中央大学教授)

- 1.「ギャスケル作品における子どものイメージ——『ルース』を中心に」

瀧川 宏樹(近畿大学非常勤講師)

- 2.「女性が伝える物語——

“The Old Nurse's Story”と *Wuthering Heights*」

石井 明日香(東京学芸大学非常勤講師)

講 演:司会 杉村 藍(岡山県立大学教授)

「カントリー・ハウスにみるホームの変遷

—— ギャスケル、ハーディ、フォースターとイングリッシュネス」

金子 幸男(西南学院大学教授)

閉会の辞:日本ギャスケル協会副会長 大島 一彦(早稲田大学教授)



(撮影:大野龍浩)

研究発表

1.「ギャスケル作品における子どものイメージ——『ルース』を中心に」

本発表では、「子ども」と「無垢」をキーワードとして、「リビー・マーシュの3つの祭日」、「手と心」、『ルース』における子どもにまつわる描写に着目し、ギャスケルが抱く子どものイメージを考察した。

「リビー・マーシュの3つの祭日」や「手と心」、そして『ルース』に登場するトム(物語冒頭で溺れているところをベリンガムによって助けられた子ども)やレナードら、子どもの描写を通じて浮かび上がるのは、ギャスケルが子どもの無垢と内面の善を結び付け、子どもを大人の世界を救うシンボルとみなしていた点である。

こうした子どもの無垢のイメージはルースの描写にも用いられている。ギャスケルは堕ちた女になった後のルースに対して「無垢」という言葉を用いてはいない。しかし、ルースの子どもらしさは作品の最後まで強調され、子どものように善良な心を失わずに生きた存在としてルースは描かれている。ギャスケルは読者に対するルースの共感を保ち続ける一助として、子どものイメージを巧みにルースの描写に盛り込んだのである。(瀧川 宏樹)

2. 「女性が伝える物語 —— “The Old Nurse’s Story” と *Wuthering Heights*」

本発表では、主に Elizabeth Gaskell の “The Old Nurse’s Story” (1852) と Emily Brontë の *Wuthering Heights* (1847) の共通点と違いを通して、Gaskell が描いた女性同士の関係についての考察を試みた。直接の影響関係は不明だが、比較により、Gaskell の特徴が見えてくる。二つの作品は異なる点も多いが、ともに女性が語る物語で、語り手が子どもの幽霊を見る、という場面も共通している。他の作家と同じような手法、テーマを扱いながら、Gaskell は内容においても構造においても、独自の描き方をしている。Gothic あるいは幽霊物語の枠組みを使いながら、女性が立場の違いを超えて協力する可能性を追求した。生者が死者の犠牲の上に存在し、生者が死者の記憶に取りつかれている限り幽霊は存在し得る。そして幽霊は身勝手な大人の罪を思い起こさせるものであるのと同時に、社会システムの犠牲となった女性や子どもの姿でもある。Gaskell は単なる教訓、幽霊物語であることを超えて、社会システムの中で無力である女性が、互いに協力することで困難を乗り越える可能性を描いている。Gaskell 自身もまた、女性が作家であることの困難を乗り越えて、文学の伝統の担い手となったのである。(石井明日香)

講演：「カントリー・ハウスにみるホームの変遷

—— ギャスケル、ハーディ、フォースターとイングリッシュネス」

金子先生はギャスケル、ハーディ、そしてフォースターの小説を取り上げこれらに描かれたカントリー・ハウスを国家の表象、イングリッシュネスの指標として、作家によりまた時代の変化によりどのような違いが見られるかを詳細かつ明確に論じられた。『妻たちと娘たち』では領民に深い関心を寄せるよき領主ロード・カムナーと、教養がなく時代の急激な変化に対応できない保守的なハムリー氏を比較・対照された。ハーディの『微温の人』では城の正統な相続人になりえないモラルを欠いた貴族の姿が描かれ、『遙か狂乱の群れを離れて』においてはイングリッシュネスの表象として機能しなくなったカントリー・ハウスの代替として羊の毛刈り小屋が登場すると指摘された。一方フォースターは主人公マーガレットを「ハワーズ・エンド」の精神的理解者とし、異なる階級、人種、思想を結びつけることによってイングランドという文化を維持・継承する者と位置づけているとした。金子先生の熱のこもった、そして同時に緻密な論考に魅了され、瞬く間に講演の時間が過ぎていった。(文責 杉村 藍)

「例会に参加して」

2016年6月4日(土)に岐阜県立看護大学にて開催された第28回例会は、会長の鈴木美津子東北大学名誉教授の開会の辞によって開幕した。鈴木氏は、熊本地震の影響で会場校が熊本大学から変更になったことに触れられ、対応に当たられた先生方に御礼の言葉を述べられた。また、岐阜県立看護大学ではカラスがヒナを守るために人を襲撃するというハプニングが起きていることにも言及され、例会が無事に開催されたことに感謝の意を示された。

次に、宮丸裕二中央大学教授の司会のもと、二件の研究発表があった。瀧川宏樹近畿大学非常勤講師は、『ルース』を中心にギャスケル作品の子どものイメージについて考察され、ギャスケルが子どもの無垢さを取り入れることで人間の内面の善良さを引き出したことを論証された。堕ちた女となった後、ルースは「無垢」と表されることはなくなるが、彼女の「子どもらしさ」が引き続き描写されることで、彼女の印象が向上するという指摘が特に印象的であった。石井明日香東京学芸大学非常勤講師は、女性が語る物語としてギャスケルの “The Old Nurse’s Story” とエミリー・ブロンテの *Wuthering Heights* を比較考察された。ゴシックの枠組みを使って描かれる家父長制社会での女性たちの困難、生者が死者の記憶に取り憑かれていることを表すために用いられる幽霊の存在などの二つの作品の共通点が例証され、さらに、ギャスケルの作品の方には階級を超えた女性同士の連帯のテーマが存在することが指摘された、興味深いご発表であった。

休憩を挟み、杉村藍岡山県立大学教授の司会により、金子幸男西南学院大学教授のご講演があった。金子先生は、ギャスケル、ハーディ、E. M. フォースターによる19世紀のカントリーハウス小説において、イングリッシュネスを示すカントリーハウス表象がいかに描かれているのかを詳しく論じられ、これらの作品の特徴として「産業主義に対するメリー・イングランドへの憧れ」を指摘された。示唆に富んだ、興味が尽きないご講演であった。

例会は、副会長の大島一彦早稲田大学教授の閉会の辞によって閉幕した。終了後、サンホテル岐阜羽鳥島内のソルエルにて懇親会が行われ、参加者の親交が深められた。例会の参加者は23名、懇親会の参加者は21名であった。例会の開催をご準備下さった全ての先生方に、心より感謝申し上げます。(富山大学専任講師 小田 夕香理)

第 28 回大会レポート

日 時：平成 28 年 10 月 1 日（土）午後 1 時より

会 場：東北大学 東京分室（サビアタワー 10F）

開会の辞：日本ギャスケル協会会長 鈴木 美津子
（東北大学名誉教授）

シンポジウム：「モダンの萌芽を探して
—— 女性、労働、ホーム」

司会・講師 松村 豊子（江戸川大学教授）
講師 池田 晶子（江戸川大学客員教授）
講師 鈴木 哲平（江戸川大学専任講師）
講師 松永 典子（帝京大学専任講師）



（撮影：大野龍浩）

総 会：総合司会 事務局長 石塚 裕子 （神戸大学教授）

講 演：司会 松本 三枝子（愛知県立大学教授）
「作家の礼儀作法」

阿部 公彦（東京大学准教授）

閉会の辞：日本ギャスケル協会副会長 大島 一彦（早稲田大学教授）

シンポジウム「モダン」の萌芽を探して —— 女性、労働、ホーム

ギャスケルは生前の人気とは裏腹に、モダニストたちが活躍した 20 世紀以降、自立心に乏しい二流作家として論じられることが多い。しかし、《女性》《労働》《ホーム》に関する時代思潮が地球規模で大きく刷新される今日、労働者への理解と共感において秀でた彼女が「美しい」“dove”でなく「偉大な」“eagle”の 1 人となる可能性について論じた。

（松村 豊子）

「ギャスケルは「自分だけの部屋」を望んだのか？」

『北と南』（1854-5）をヒロイン、マーガレット・ヘイルの教養小説（感情教育）として読み、マーガレットが最終的に希求するのが V. ウルフの言う「自分だけの部屋」を超えた「自分だけの家」とも呼べる地域社会への貢献である可能性を検証した。女性が作家になるには年取 500 ポンドと「自分だけの部屋」が必要であるというウルフの説を念頭におくと、成長が期待されるマーガレットの性格付けは①知性と教養の点で、新興工業都市より歴史ある学問の町、オックスフォードに相応しい②「家庭の天使」（“Angel in the House”）でなく、日常的な雑事（感情労働を含む）に悦びを感じる「力強い慰めの天使」（“Strong Angel of Comfort”）である③階級差を超えて、労働者とも「秘密、嘘、沈黙」を共有する「心の友」となる④階級・地域の文化的差異に拘らず、時には法律をも破る自身の混乱した内省を顧みる「自分だけの部屋」に限定されない、他者との絆を培える時間と空間がある、となる。マーガレットとソーントンの結婚は、孤児な環境で成人したギャスケルが結婚し、作家になることで「自分だけの部屋」を脱し、「自分だけの家」の構築を目指した証と考えられる。

（松村 豊子）

「新たなライフデザインを探して：

『妻たちと娘たち』をガーデンデザイン（造園）から読む」

『妻たちと娘たち』（1864-6）をガーデンデザイン（造園）の視点から読むと、ギャスケルが当時草創期にあった造園ビジネスと文化（19 世紀後半に確立する分野）にすでに精通し、本作品の人物造形と背景に積極的に取り入れていることが分かる。

園遊会等々が催され、階級を越えて人々が出会い、物語展開の主要な場面となる貴族（カムナー家）の庭園は、当時流行の庭園技術を駆使したものであり、尚且つ、当時初めて考案された「フローラル・デザイン」（花を①decorating ②dressing ③gift-giving として使用する）はヒロインはじめ主要人物の性格を表す方法として活用されている。例えば、モリーとシンシアは花束や髪飾りをイメージとスキルに従って作成しているなど、ギャスケルは総計 40 回以上も多種多様な草花のやり取りをとおして人物像を描写。社会的な制限が多く、「抑圧」を余儀なくされた女性たちの感性（グローバル時代の現代にも通じる女性らしさ）の違いを読者に伝えている。ガーデンデザインに対するモダンな姿勢をはじめ、ギャスケルがビジネス感覚と才能に恵まれた偉大な作家であることを明らかにしている。

（池田 晶子）

「Gaskell と Bowen における ‘home’

—— *Mary Barton* と *Last September* をとおして ——」

人間が心の安らぎを得られる場所を、その人にとっての ‘home’ と呼ぶならば、カナダでの新しい生活の描写で結ばれる小説 *Mary Barton* を、‘home’ 探求の物語とすることも許されるだろう。一方、およそ 80 年後に書かれた Elizabeth Bowen の小説 *Last September* の結末では、ビッグハウスが炎上する。これは、アイルランドにおけるプロテスタント・アセンダンシーの没落とともに、モダンを生きる人間の ‘home’ の喪失を象徴していると言っているだろう。

二作品の対照的な結末から、ヴィクトリア朝時代からモダニズム期への一つの変化が垣間見えてくる。‘home’ への希望の喪失である。確かにそれは、土地という縛りからの解放をも同時に意味し、モダンの時代、人々は国境を、文化や言語の境界をも軽やかに越え、また、未踏の土地の探索よりも、むしろ人間の内面の探求へと向かった。

しかし、こうした「輝かしい」モダニズムのあとを生きるわれわれにとって ‘home’ の不在、不要を言い続けることは果たして可能だろうか。*Mary Barton* は、‘home’ の希求が人間にとって普遍的なものではないかと、時代を超えてわれわれに問いかけてくるのである。（鈴木 哲平）

「ヴェラ・ブリテン『若者の証』における「働く」女の教養／成長小説」

文学史上、19 世紀において特徴的な文学形態と見なされる教養小説であるが、近年、モダニズム文学においても研究が進展している。他方、近年のフェミニズム研究では新自由主義下におけるフェミニズムの状況をポストフェミニズムと呼ぶ。このような現代の研究動向を踏まえて、本発表では、フェミニズム教養／成長小説の系譜にある作品として、ヴェラ・ブリテンの『若者の証』（1933）を考察した。ブリテン作品がフェミニズム教養小説の系譜において重要であるのは、彼女が中産階級出身の大学卒の白人女性として、今日のチック・リット小説の原型と考えられるからだ。本発表では、ブリテン作品を、19 世紀から今日に続く女の経験として描いた作品として系譜学的に読むことにより、今日に求められる女性文学とは、個人の成長だけではなく社会との対話的成長を可能にするものであることを示唆した。（松永 典子）

講演：「作家の礼儀作法」

阿部公彦氏は、ギャスケルの『メアリ・バートン』、ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』などにおける、語り手、登場人物、読者の関係を、言語理論の「ポライトネス」の観点から分析した。例えば、『メアリ・バートン』の語り手は、メアリの描写では接近しつつも一定の距離を保ち、彼女に対して敬意を表しているが、メアリの友人サリーに対しては断言をはばからずある種の断罪性がみられる。

一方で、『ミドルマーチ』の語り手は、自由間接語法を用いることにより、登場人物の中に入っていく語りが展開するが、同時に彼らと距離をとるある種のフォーマルな語りにより、登場人物を断罪したり、彼らに共感を表明したりするバランスがとられている。このようなエリオットの語り手は、自らの過去の語りに言及しつつも、さらに物語を進めていく語りであり、語りの時間の中で、登場人物に肉薄しようとする特徴を持っている。近著『善意と悪意の英文学史』への言及などもあり、会場からは次々に質問があり、阿部氏はそれらに丁寧に回答し、充実したひと時は懇親会場でも続いた。（文責 松本 三枝子）

「大会に参加して」

日本ギャスケル協会第 28 回大会は、東京駅隣接のサピアタワー 10F 東北大学・東京分室にて 43 名の参加者を迎えて開催された。今回のシンポジウムのテーマは「モダンの萌芽を探して —— 女性、労働、ホーム」で、松村先生、池田先生、鈴木先生、松永先生の四名がパネリストとして発表された。モダニズムやフェミニズムの視点による他の作家の文学作品との比較や、ギャスケルの美術感覚やホーム（‘home’）に対する考えを、それぞれ *North and South*、*Wives and Daughters*、*Mary Barton*、*The Life of Charlotte Brontë* を取り上げながら明らかにしており、とても良い勉強になった。

阿部公彦先生による講演「作家の礼儀作法」は、*Mary Barton* とエリオットの *Middlemarch* を比較し、語り手と登場人物の距離感から作家の登場人物や読み手に対する姿勢（作法）を検証されており、大変興味深く拝聴した。

丸の内の神戸屋レストランでの懇親会には、大学生や院生を交えた 26 名が参加し、イタリア料理に舌鼓を打った。（北里大学非常勤講師 矢嶋 瑠莉）

日本ギaskell協会役員会報告

1 役員会報告

1) 平成 28 年度第一回役員会 (6 月 4 日 (土) 12:00 ~ 13:40 於 岐阜県立看護大学実習棟 105 演習室)

①『論集』投稿規定改正について

【執筆要項】「(スペースを含める)」を削除する。【提出】の「印刷コピー 3 部」は「1 部」とする。

『論集』奥付の「編集者」を「編集委員会」に変更する。

②会則改正について

1. 第二条 (事務局)「本会の所在地は事務局とし、事務局は原則として事務局長の所在する研究機関に置く」に改正する。2. 第十三条 (メーリングリスト)「本会の情報交換のためにメーリングリストを開設する。原則として全会員が登録し、自由に投稿できる。ただし、問題が生じた場合には会長の権限で停止することもある。」を追加する。3. 上記追加に伴い、現行の「第十三条 (会則の改廃)」を「第十四条 (会則の改廃)」とする。4. 会則第五条 (会員)「会員の入会は役員会がこれを承認する」を「会員の入退会は役員会がこれを審議し、承認する。今後は新入会員の承認は審議事項とする。」に改正する。併せて、「日本ギaskell協会倫理規定」1 に記載されている「障害」を「障がい」に表記を改正する。

③メーリングリストの活用方法について

現在、1/3 強の会員が登録しているが、将来的にニューズレターを電子媒体で添付・配信などの活用法を踏まえ、より多くの会員の登録のため、来年度は会費納入の連絡の際、メールアドレスを事務局に送信するよう全会員に通知する。

④例会、大会案内のアップ時期について

遠隔地からの参加者を考慮し、1 か月 ~ 1 か月半前には HP に案内をアップする。

⑤創立 30 周年記念事業について

『記念論文集』(仮称)と『ギaskell論集』30 周年記念号の刊行を創立 30 周年記念事業とする。

⑥「ニューズレター」・『論集』の印刷所について

オメガ印刷から篠原印刷、大阪教育図書にそれぞれ印刷所を変更する。

2) 平成 28 年度第二回役員会 (10 月 1 日 (土) 11:00 ~ 12:15 於 東北大学東京分室サピアタワー 10 階会議室 C)

①シンポジウムを基にした非会員の論文について

シンポジウム登壇の非会員の論文は、原則として『ギaskell論集』非掲載だったが、今後は寄稿論文として掲載する。非会員の寄稿論文に関しては原則として査読を行わない。論文提出に至るまでの手順は『ギaskell論集』投稿規定に従う。

②『論集』投稿規定改正について

【執筆要項】2) の 1 ページ当たりの字数は、印刷所の変更に伴い、37 字 × 32 行に変更し、また、HP 上の執筆用テンプレートも同様に変更する。【提出】の「(FD、MO、CD、USB メモリを送付してもよい)」を削除する。「細則 1」に「希望すれば抜刷を実費で購入することができる。」を追加し、事務局から執筆者に連絡する。「細則 4」として「英文の論文および要約は、英語を母語としない投稿者については、投稿前にネイティブ・スピーカーによる原稿のチェックを受けることが望ましい。」を加える。

③非会員講演者の謝礼について

退職者と現役者の謝礼金は、今後一律とする。退職者については上限を設定して交通費を支給する。

④英国 Gaskell 協会会費締切時期について

現在、7 月末日が締切だが、英国 Gaskell 協会の締切が 7 月 20 日のため、本協会も 7 月 20 日を締切とする。

⑤ HP について

レンタルしている大塚商会 HP のサーバが 11 月で更新時期を迎えるが、経費の面から契約更新はせず、ドメインキングに変更する。

⑥平成 29 年度例会と大会の日程、プログラム、会場について

例会：平成 29 年 6 月 3 日 (土)、TKP 大宮駅西口カンファレンスセンター、講演講師 鮎澤乗光先生、講演司会 島高行先生、研究発表 劉熙氏、宇田和子先生、司会 矢次綾先生。

大会：平成 29 年 9 月 30 日 (土)、熊本大学、講演講師 高橋和久先生、講演司会 大島一彦先生、シンポジウム司会・講師 市川千恵子先生、講師 木村正子先生、伊藤正範先生。

2 総会報告

①会則改正の承認。上記第一回役員会報告②の通り。

②投稿規定改正について。上記第一、二回役員会報告各①②の通り。

③英国 Gaskell 協会会費締切時期について。上記第二回役員会報告④の通り。

④メーリングリスト活用について。上記第一回役員会報告③の通り。

⑤会創立 30 周年記念行事業について。『記念論集』引き続き原稿募集中。

⑥平成 29 年度例会・大会の予告。上記第二回役員会報告⑥の通り。

(文責 石塚 裕子)

事務局報告（平成27年度）

平成27年度日本ギヤスケル協会会計報告（2015年4月1日～2016年3月31日）

平成27年度一般会計予算案

収入		支出	
前年度繰越金	746,066	大会費	150,000
年会費	500,000	例会費	150,000
（英国協会費を含む）		印刷費	150,000
懇親会会費	160,000	通信費	40,000
		事務費	30,000
		英国協会費	145,000
		研究会会場費	10,000
		書評対象書籍代	20,000
		次年度繰越金	711,066
合計	1,406,066	合計	1,406,066

平成27年度一般会計決算

収入		支出	
前年度繰越金	746,066	大会費	230,004
年会費収入	513,500	例会費	167,425
【内訳】		印刷費	143,424
当協会	387,000	通信費	43,472
英国協会	126,500	事務費	46,038
（一）振込手数料	7,160	英国協会費	134,440
懇親会収入	250,000	研究会会場費	10,000
【内訳】		書評対象書籍代	10,691
例会	110,000		
大会	140,000	（小計）	785,494
（一）振込手数料	1,660	次年度繰越金	715,252
合計	1,500,746	合計	1,500,746

平成28年度日本ギヤスケル協会予算案（2016年4月1日～2017年3月31日）

平成28年度一般会計予算案

収入		支出	
前年度繰越金	715,252	大会費	150,000
年会費（含 英国協会）	500,000	例会費	120,000
懇親会会費	160,000	印刷費	245,000
		通信費	40,000
		事務費	30,000
		英国協会費	140,000
		研究会会場費	10,000
		書評対象書籍代	15,000
		（小計）	750,000
		次年度繰越金	625,252
合計	1,375,252	合計	1,375,252

会 計 石 塚 裕 子
小 田 夕香理

会計監査 長 浜 麻里子
桐 山 恵 子

◆◆◆◆◆日本ギaskell協会 第29回例会の御案内◆◆◆◆◆

日 時：平成29年6月3日（土）午後2時から 会場：TNP 大宮駅西口カンファレンスセンター
研究発表 司会：矢次 綾（松山大学教授）

1. 「ギaskell『克蘭フォード』と訳述『克蘭弗』の比較を通じて見る
ヴィクトリア朝文化と五・四新文化運動」

劉 熙（関西学院大学大学院生）

2. 「食から探る Cranford」

宇田 和子（埼玉大学名誉教授）

講 演 司会：島 高行（実践女子大学教授）
『ルース』の表層と深層——「更生」から「救い」へ——

鮎澤 乗光（元東京女子大学教授）

◆◆◆◆◆日本ギaskell協会 第29回大会 予告◆◆◆◆◆

日 時：平成29年9月30日（土）午後1時から 会場：熊本大学
シンポジウム「群衆との対話——ヴィクトリア朝の小説における都市の風景——」（仮題）

- 司会・講師 市川千恵子（茨城大学教授）
講師 木村 正子（岐阜県立看護大学専任講師）
講師 伊藤 正範（関西学院大学教授）

講 演 司会：大島 一彦（早稲田大学教授）
「ヴィクトリア朝小説の / を覗き見」

高橋 和久（東京大学名誉教授）

研究発表を募集しております。お申し込みは12月末日までに事務局へメールにてお願い申し上げます。

◆◆◆◆◆研究会予定◆◆◆◆◆

ギaskellの中編、短編小説の読後感を自由に語り合い、鑑賞する研究会です。7月には30回目を協会創立より一足早く迎えます。今年度も以下のような作品を取り上げますので、皆様のご参加をお待ち申し上げます。

作 品：平成29年	5月	“Six Weeks at Heppenheim”	(1862)
	7月	<i>A Dark Night's Work</i>	(1863)
	9月	“The Cage at Cranford”	(1863)
	11月	“Crowley Castle”	(1863)
平成30年	1月	<i>Cousin Phillis</i>	(1863)
	3月	“French Life”	(1864)

日 時：奇数月 第2日曜日 午後2時～午後4時

会 場：実践女子学園桜会館（東京都渋谷区東1-1-40、tel: 03-3407-7459）

JR 渋谷駅東口より徒歩7分。渋谷警察署脇の六本木通り、首都高速に沿って坂を上る。一つ目の信号を渡り、住友不動産ビル裏に向かう細い道を右折、右手の建物。

参加費：200円（会場使用料として）

日時、会場の変更がある場合は日本ギaskell協会 HP に掲載しますので、新着情報で必ずお確かめください。
（多比羅 眞理子）

●●●●● 編 集 後 記 ●●●●●

前号より編集を担当させて頂いていますが、入念に読んだつもりでも、なかなか間違いに気づかないことが多く、「ひやり」「はっと」の連続でした。それでも会長の鈴木先生、事務局長の石塚先生に助けて頂いて、何とか発行するところまで漕ぎつけることができました。両先生方には大変感謝申し上げます。また玉稿をお寄せ下さった先生方にも心より感謝申し上げます。今後はさらに細かいところまで気を配り、「ニューズレター」を充実させていきたいと思っておりますので、ご意見やアイデアなどをぜひお寄せください。

（編集 芦澤久江）

発 行：日本ギaskell協会

〒657-8501

神戸市灘区鶴甲1-2-1

神戸大学大学院国際文化学研究科

石塚裕子研究室

URL: <http://www.gaskell.jp>

e-mail: secretariat@gaskell.jp

発行日：2017年5月1日